「野田笛浦」覚え書

國金　海二

大正八年（一九一九）十一月に、百人の故人が生前の功労によって位を贈られている。

そのうち正五位を贈られた人が三十五名、名を知られた人に鈴木重胤（国学者、著に『日本書紀伝』『詞の捷路』など）、橘曙覧（歌人・国学者、歌集に『志濃夫廼舎歌集』）、東条義門（国語学者、著に『山口栞』『活用指南』など）、華岡青洲（外科医）などがおり、ともに江戸後期に活躍した人達である。

それらの著名人にまじって野田笛浦（希一、一七九九―一八五九）という今日ではあまり世に知られていない詩人がいる（その経歴については『文藝論叢』二十四号に略述した）。

彼はどのような功労によって正五位を追贈されたのであろうか。国立公文書館に残されている記録には次のようにある。

旧丹後田辺藩執政
故　野田　希一

笛浦ノ号ヲ以テ儒林ノ重ヲ為セリ文政九年清国ノ商船得泰号駿河ノ清水港ニ漂着シ駿府代官之ヲ長崎ニ護送スルニ際シ官差ニ応シテ船ニ在リ筆談シテ清客ヲ驚服セシメタルヨリ名声海内ニ播キ尋テ旧田辺藩主牧野氏ノ抜擢スル所トナリテ遂ニ執政ニ任セラレ学制ヲ革メテ文教ヲ興シ海防ニ備ヘテ砲台ヲ築キ一藩文武ノ綱紀ヲ振ヘリ砲術未タ進マス諸藩未タ著手セサルモノ多キノ時僻陬ナル田辺藩ニ於テ工事数年ニ亘リ堅牢ナル台場ヲ造リテ大砲大形三門小形六門ヲ備ヘ以テ日本海ノ要津タル今ノ舞鶴ニ於ケル防備ヲ完フシタルハ儒学ヲ研鑽シ文教ヲ振起シタルノ功労ヲシテ更ニ光輝アラシムルモノト謂フ可シ

これによると「儒学ヲ研鑽シ文教ヲ振起シタ」ことおよび、「学制ヲ革メテ文教ヲ興シ」たことと「海防ニ備ヘテ砲台ヲ築」いたことが主な理由のようであり、『攝東七家詩鈔』（嘉永二年刊）や『嘉永二十五家絶句』などに名をつらねている詩人としての笛浦の姿は全くみられない。

これは義門が用言の活用の研究や、青洲が麻酔剤を案出して外科手術に成功したことなどを評価されて贈位されているのに比べて文学に対する評価の低さないしは無視を表すものでもあろう。

この主な贈位理由をもう少し詳しくみてみたい。

「儒学ヲ研鑽シ文教ヲ振起シタ」「学制ヲ革メテ文教ヲ興シ」とは、具体的には十三歳より江戸に遊学し古賀精里の塾に入り、後、昌平黌に学んだことと、田辺に帰ってから藩の学問所を創設または刷新したことなどを指すのであろうが、学問所創設については確証はないようで（『日本教育史資料』には元治元年〈一八六四〉とある）、

また帰藩後における笛浦について、『近世藩校に於ける学統学派の研究』（笠井助治）には「田辺藩の学風は、……純闇斎学を唱道し、一藩挙って闇斎派朱子学風を確信遵奉し、昌平学派の笛浦の学風とはやや趣を異にしたためか、或いは異常の抜擢と諸政治革新に対する反感も手伝ってか、家老筆頭の闇斎派牛窪松軒等と意見合わず、笛浦は没するまで学問所に於て蘊蓄を傾けて講学したことはなかった。そして、以後に於ける純正闇斎学派と昌平学派抗争の種を播いた。」とも述べられており、特にとりたてて言うほどのものではない。

次の「海防ニ備ヘテ砲台ヲ築」いたことに対しては、異国船の渡来が相ついだ時に日本海沿岸の海防に意を用いたことであり、正当に評価されてしかるべき功労であったであろう。

しかし笛浦の追贈理由には次の二点が考えられないだろうか。

一つは、得泰号上で「筆談シテ清客ヲ驚服セシメタル」ことである（詳しくは『文藝論叢』二十四号参照）。大正八年前後の日本の状況をみると、第一次世界大戦（一九一四―一九一八）に参加し、そのさなか一九一五年に中国に対して二十一か条の不当な要求をつきつけている。これに対して中国では排日運動が盛んになり、一九一九年の五・四運動へと進展するのである。このような時に、中国一辺倒ともいうべき風潮の江戸時代にあっても中国の文化人と互角以上にわたりあえる青年のいたことを示したかったに違いない。これは先に挙げた鈴木重胤・橘曙覧など国粋主義を主張する国学者たちや今日では無名の南朝の遺臣たちが被贈位者に多くみられることとともに時代の反映であろう。（ちなみに、この頃は南朝正統論がほぼ主流を占めた時代である）。

もう一つの理由は、贈位に関する記録には触れられていないが、彼の詩文に対する隠れた評価も与っていたのではないかということである。詩は前記のように嘉永年間には世に聞こえた詩人であり、文もまた僧月性によって斎藤拙堂らとともに「文章の四大家」と称せられていたのである。これらのことが贈位に全く関係ないとは考えられにくい。これは橘曙覧が国粋主義を精神とする国学思想を信奉し鼓吹したことのみによる贈位とは思えず、彼の「万葉を学びて万葉を脱し」と正岡子規に評された歌人としての評価も併わせてのものだと考えられるからである。

では、笛浦の詩とはどのようなものか。律詩・絶句をそれぞれ二首挙げる。「昌平橋納涼」（『嘉永二十五家絶句』所載）以外は『海紅園小稿』（得泰号に持参し、朱柳橋、江芸閣に評を乞い、また頼山陽・篠崎小竹などの批評も付されている。笛浦二十八歳以前の作品）『攝東七家詩鈔』（篠崎小竹の序、広瀬旭荘の跋を付して上梓）にあり、さらに「秋夜所感」は『東瀛詩選』（清末の最も著名な学者、兪樾が選んだ日本漢詩のアンソロジー。笛浦の詩は十一首が選ばれている）にも採られ、またそれに「春游」の一部が紹介されている。

秋夜書感

篝灯焰尽漏声長　半炷全銷榻上香
人対好書如遇友　雁伝遠信似還郷
秋寒霜気穿帷帳　夜久月痕臨屋梁
抛擲枌榆成底事　風花一任十年狂

この詩について、柳橋は頷聯と最後の句に圏点を打ち「唐音遺響」

と評し、山陽は「頸聯十四字、千古不朽」と称揚している。柳橋の指す頷聯は陳腐な句であるが、頸聯のとくに「夜久しくして月痕屋梁に臨む」はすぐれた表現といえよう。なお『東瀛詩選』では第五句を「秋深霜気侵帷帳」、第八句を「風花贏得十年狂」にしている。

湊川懐古

六竜税駕果何州　砥柱誰人撑急流
其奈東魚呑碧海　幸看南木護金甌
一時妙算翻韜略　三世精忠貫斗牛
熱血灑沙凝不散　染成紅蓼満川秋

この詩について、柳橋は第五句以下に圏点を打ち「蒼凉悲壮」と評し、山陽は「頸聯工力兼到、可謂雄麗」と言い、さらに「清商眼未看太平記、然能知其蒼凉悲壮、詩之感人如此」と、この詩が楠氏の悲壮な最後を知らない柳橋をも感動せしめたことを記し、詩のもつ力というものを特筆している。(なお、笛浦にはこの外の詠史詩として「芳埜懐古」と題する「南山往事夢茫茫　万樹春深不復香　日夜陰風吹自北　小楠無力護花王」などがある)。

春　游

春服含風軟　趁晴任所之
落花深一寸　不怪馬蹄遅

これについては、柳橋は転・結句に圏点を付し「香艶動人」と評している。また『東瀛詩選』では逸詩とみなされ、兪樾が記憶していた転・結句のみが紹介され「其語殊俊」と述べられている。二人の中国人から賞美された二句は、たしかに桜の花びらの散りしくなか、馬の歩みにまかせて春を訪ねている有様が巧みに詠われている。

昌平橋納涼

夏雲擘絮月斜明　細葛含風歩歩軽
数点篝灯橋外市　籠虫一担売秋声

ところどころにかがり火が燃えている橋のたもとの夜店の列、そのなかに虫かごを並べて早くも「秋声を売る」店がある、とした転・結句がとくに面白い。詩材を身近なものにとり、それを平明なことばで表現するという江戸時代後期の詩の特徴がよく表われており、同じく江戸風物を詠じた松崎慊堂の「夜市納涼」と題する絶句「黄昏浴罷去迎風　灯市徜徉西又東　時節未秋秋已至　満街夜色売虫籠」と肩を並べることのできる佳作であろう。

以上四首のうち「昌平橋納涼」を除いては二十八歳以前の作であり(「昌平橋納涼」は作詩年代不明)、決して笛浦の代表作といえるものではないが、村上仏山が長崎の友人から詩稿の批評を求められたのに対して「清客詩を論じて妙趣多し」という句を含んだ詩のあるのをふまえて、清客の批評のあるものを三首選んだのであり、外に佳篇は少なくない。しかし詩人としての笛浦は現在ほとんど忘れられており、公的な記録にはその俤すらとどめていない。すなわちこの小文を書かせた所以である。